

Analysis of Factors Concerned with Selection of Favorite Technique in Judo

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/20236

柔道における得意技選択に関連する要因分析

出村 慎一・村瀬 智彦*

Analysis of factors concerned with selection of favorite technique in judo

Shinichi DEMURA · Tomohiko MURASE*

Abstract

The purpose of the present study was to determine the decisive factors concerned with selection of favorite technique in judo.

The questionnaire consists of 43 items which were selected from three aspects: characteristics of judoists (physique attribute, physical function and so on), characteristics of favorite technique, circumstances. The subjects selected in this study were 919 male college judoists.

However, 809 of total samples were employed for practical analysis after eliminating data of those without black belt or with discrepancy answers.

The subjects were divided into five groups based on favorite techniques (i. e. Two-arm Shoulder Throw, One-arm Shoulder Throw, Inner Thigh, Major Outer Reaping and Sweeping Loin). Means and standard deviations were calculated to examine the total group and among the above five groups.

The main findings obtained are summarized as follows:

- 1) For characteristics of judoists, height was the most decisive factor for selection of the favorite technique, also some partial physique attributes such as arm length and leg length were relatively important.

Physical function (total strength and flexibility), result of past contests, quantity of practice, graspling form and own skill level are considered in selection of the favorite technique.

- 2) It was inferred that characteristics of technique, especially way of attacking and ease of getting points, were taken into account in selection of the favorite technique.
- 3) Of circumstance variables, advice of coach and teammates were the most decisive factors, while there were no relationships between the tradition of a team and influence of famous judoist and selection of the favorite technique.

緒 言

一般に柔道選手は、投げ技の習得過程において多種多様な技を練習した後、得意技すなわち各柔道選手特有の技を身に付けていく。

柔道における投げ技あるいは固め技等の対人的技術は、指導者の適切な指導のもと、相手と自分との相対的な関係において基本動作が協応統一され対人的な特有の方法として個人に内面化され技能となると考えられている。¹³⁾

従って、数多く存在する柔道の投げ技の中から限られた技を選択し専門的に練習するように至る過程には様々な要因が関係していると推測される。

技の指導においては、得意技選択に関連する諸要因を理解した上で、適切な指導を行うことにより、より効果的に技能の向上を図ることができるであろう。

今日まで、得意技とそれに関わる諸要因、例えば、体格・姿勢^{2),3),5),9),14),15),19),21)}、体力・運動能力^{2),6),18),24)}、精神的特性⁷⁾、性格¹⁶⁾、傷害^{10),20)}との関連が研究され、また得意技の統計学的構造¹⁾が検討されている。

しかしながら、得意技選択に関連する諸要因

について柔道選手の特性、技の特性あるいは環境的な側面等の多面的に明らかにしようとした研究は殆ど見られない。

従って、本研究においては大学柔道選手を対象として、柔道選手自身の特性(体格的、機能的特性等)、得意技本来の特性及び柔道選手をとりまく環境に関する3側面から、得意技選択に關与する決定要因を選手全体及び得意技の異なる群別に明らかにすることを目的とした。

方 法

1 調査項目の選択

調査項目の選択にあたっては、先行研究を通して吟味し、K大学及びR大学の柔道部員30名を対象として予備調査を実施し検討を重ねた。

その結果、柔道の投げ技における得意技を選択する際、決定要因となりうると考えられる43の調査項目を選択した。各項目は1. 柔道選手自身の特性に関する項目、2. 得意技本来の特性に関する項目及び3. 柔道選手をとりまく環境に関する項目のいずれかに分類される。また1. については、更にa. 体格に関する項目、b. 身体機能に関する項目及びc. その他に分類される。(Table 1.)

Table 1. Category and item numbers

Category	Item #
1. Characteristics of judoist	a. Physique attribute : 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8
	b. Physical function : 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16
	c. etc. : 18, 19, 26, 29, 31, 37, 38, 39, 42
2. Characteristics of favorite technique	: 17, 25, 30, 32, 33, 34, 35, 36, 40, 41, 43
3. Circumstances	: 20, 21, 22, 23, 24, 27, 28

Note) Item numbers correspond to those in Table 3.

Etc. includes personality, preferred hand, graspling form and so on.

2 調査期間及び対象

調査は、昭和62年5月～12月にかけて、質問紙を用いて全国62の大学(大学校及び高等専門学校を含む)の柔道部に所属する柔道選手919名

を対象として実施した。この内、無段者及び回答に矛盾を含む^{※1)}110名(全体の12.0%)の資料は分析対象から除外した。従って、本研究における標本数は809名であり、全体及び得意技の異

なる群別（以下、得意技別）標本数、段位、経験年数等は Table 2.^{*)} に示す通りである。なお、得意技別の分析については、標本数の関係

上、全標本の 1 割以上の度数が認められた両手背負投、一本背負投、内股、大外刈及び払腰の 5 種類の技^{*)}について行なった。

Table 2. Characteristics of college judoists

variable	(unit)	Total N=809	T-group N=139	O-group N=141	I-group N=167	M-group N=126	S-group N=85
Age	(yrs)	20.4± 3.2	20.4± 3.8	20.5± 3.8	20.6± 3.5	20.2± 1.2	20.8± 4.7
Height	(cm)	172.6± 5.7	167.7± 4.3	169.6± 4.0	175.6± 4.3	176.5± 5.0	176.3± 5.1
Body Weight	(kg)	79.2±15.4	69.9±11.0	72.8±10.7	81.5±13.3	87.3±16.2	94.3±17.1
Chest Girth	(cm)	98.4±17.3	93.4±18.1	94.2±17.9	100.4±14.2	102.6±16.2	104.2±22.0
Dan	(dan)	1.9± 0.7	1.7± 0.6	1.7± 0.6	2.0± 0.7	1.9± 0.7	1.9± 0.7
Y. P.	(yrs)	7.0± 3.4	6.4± 3.4	6.3± 3.4	7.6± 3.0	7.2± 3.6	6.7± 3.2

Note) Values are expressed in Mean±S. D. Y. P. : Years of participation in judo T : Two-arm Shoulder Throw
O : One-arm Shoulder Throw I : Inner Thigh M : Major Outer Reaping S : Sweeping Loin

3 分析方法

回答は、はじめに、最も得意とする技名を回答し、その得意技選択に43の項目がどの程度関係しているかを5段階で回答する形式をとった。従って、資料の分析の際には、関連の程度を示す各カテゴリーに数値を与え（非常に関係ある2、関係ある1、どちらともいえない0、関係ない-1、全く関係ない-2）全体及び得意技別に各項目における平均得点を算出した。

結果と考察

全体及び得意技別の各項目における平均値及び標準偏差は Table 3. に示す通りである。

1 得意技選択と柔道選手自身の特性との関係

a. 体格に関する特性について

体格に関する8項目についての選手全体及び得意技別の比較は Figure 1-1 に示す通りである。

全体で比較すると、8項目中正の値を示した項目は、1. 身長の高さ(0.82)、3. 足の長さ(0.19)、4. 体重の重さ(0.18)及び8. 体型(0.32)の4項目であり、特に1. 身長の高さの値は、全43項目の中で非常に高い値であった。

得意技と体格との関係については、特に、身長と得意技とが密接な関係にある^{3),5),14)}ことが

示唆されているが、得意技を決定する要因としても身長の高さは非常に高い値を示し、類似する結果が得られた。また、体型も他の体格に関する項目よりもやや高い値が認められた。

従って、柔道選手が得意技を決定する際、自分の身長の高さが決定要因として大きく影響を及ぼすが、一方、身体部位の特性、すなわち腕の長さ、腕の太さ、足の太さ、あるいは肩幅の大きさ等の諸特性は、むしろ得意技選択において殆ど考慮されないと推測される。

得意技別にみると、2. 腕の長さ、3. 足の長さ、4. 体重の重さ及び8. 体型において、得意技によって異なる傾向が認められた。つまり、2. 腕の長さにおいては、背負系統の技を得意とする群が負の値を示しているのに対して、内股を得意とする群（以下内股群、他の技も同様）が正の値を示していた。3. 足の長さにおいては、両手背負群と一本背負群で、負の値が認められたが、残りの3群では正の値が認められた。4. 体重の重さにおいては、払腰群が非常に高い値を示しているのに対し、一本背負群及び内股群は負の値を示していた。8. 体型においては、5つの技全てについて正の値が認められたが、唯一、払腰群は非常に高い値を示していた。

Table 3. Mean and Standard Deviation

No. Item	Total	T-group	O-group	I-group	M-group	S-group
	Mean±SD	Mean±SD	Mean±SD	Mean±SD	Mean±SD	Mean±SD
1. Height	0.82 1.2	1.01 0.9	0.90 1.2	0.94 1.0	0.90 1.2	0.86 1.1
2. Arm length	-0.14 1.3	-0.40 1.2	-0.51 1.2	0.05 1.3	0.34 1.3	0.02 1.3
3. Leg length	0.19 1.3	-0.16 1.2	-0.51 1.2	0.65 1.2	0.70 1.2	0.39 1.3
4. Body weight	0.18 1.3	0.21 1.2	-0.06 1.2	-0.02 1.3	0.37 1.3	1.05 0.9
5. Arm girth	-0.61 1.2	-0.65 1.1	-0.79 1.0	-0.51 1.2	-0.36 1.3	-0.42 1.3
6. Leg girth	-0.64 1.2	-0.66 1.1	-0.76 1.1	-0.59 1.2	-0.33 1.3	-0.51 1.2
7. Shoulder width	-0.73 1.1	-0.69 1.0	-0.79 1.0	-0.77 1.1	-0.59 1.2	-0.46 1.2
8. Body type	0.32 1.2	0.39 1.2	0.19 1.2	0.24 1.1	0.32 1.3	0.89 0.9
9. Grip strength	0.35 1.3	0.38 1.3	0.19 1.3	0.39 1.3	0.45 1.3	0.87 1.1
10. Arm strength	0.67 1.2	0.55 1.3	0.63 1.2	0.76 1.2	0.76 1.2	1.03 1.0
11. Leg strength	0.70 1.2	0.62 1.2	0.56 1.3	1.02 1.1	0.75 1.1	0.86 1.1
12. Flexibility	0.56 1.3	0.59 1.3	0.47 1.3	0.81 1.2	0.45 1.3	0.47 1.3
13. Endurance	0.15 1.4	0.22 1.3	0.24 1.3	0.15 1.4	-0.11 1.4	0.68 1.1
14. Skillfulness	0.62 1.2	0.64 1.2	0.51 1.2	0.68 1.3	0.27 1.3	0.51 1.2
15. Agility of total body	0.90 1.2	0.90 1.1	0.88 1.2	0.89 1.2	0.70 1.3	0.82 1.1
16. Stability	0.63 1.2	0.47 1.2	0.49 1.3	0.63 1.3	0.81 1.1	0.92 0.9
17. Sense of throwing	0.34 1.3	0.43 1.3	0.26 1.4	0.32 1.4	0.29 1.3	0.63 1.2
18. Personality	0.01 1.4	-0.02 1.4	-0.05 1.4	-0.18 1.4	0.14 1.4	0.22 1.4
19. Judgment	0.49 1.3	0.35 1.3	0.47 1.3	0.35 1.3	0.54 1.2	0.59 1.2
20. Advice of coach	0.64 1.3	0.91 1.0	0.70 1.3	0.56 1.3	0.56 1.4	0.86 1.2
21. Advice of teammate	0.51 1.2	0.73 1.1	0.75 1.1	0.45 1.3	0.33 1.3	0.75 1.1
22. Technique of teammate	0.06 1.3	0.16 1.3	0.19 1.3	-0.09 1.3	-0.23 1.3	-0.08 1.2
23. Physique of teammate	0.36 1.2	0.40 1.2	0.40 1.3	0.38 1.3	0.22 1.2	0.40 1.2
24. Skill level of teammate	0.18 1.3	0.15 1.3	0.12 1.3	0.16 1.4	0.26 1.3	0.48 1.3
25. Injury	-0.54 1.3	-0.60 1.2	-0.57 1.2	-0.60 1.3	-0.71 1.2	-0.53 1.3
26. Result of past contests	0.59 1.2	0.41 1.3	0.39 1.3	0.70 1.2	0.61 1.2	0.96 1.0
27. Tradition of team	-1.13 1.1	-1.06 1.1	-0.95 1.1	-1.21 1.1	-1.13 1.1	-1.08 1.0
28. Influence of famous judoist	-0.89 1.2	-0.92 1.1	-0.69 1.2	-0.74 1.3	-0.88 1.2	-1.02 1.2
29. Quantity of practice	0.69 1.2	0.83 1.1	0.65 1.2	0.71 1.2	0.96 1.1	0.80 1.2
30. Way of practice	0.41 1.3	0.28 1.3	0.28 1.2	0.43 1.2	0.87 1.1	0.76 1.1
31. Order of learning technique	-0.05 1.4	0.60 1.3	0.18 1.3	-0.62 1.3	0.24 1.3	-0.10 1.4
32. Way of breaking	0.40 1.2	0.17 1.2	0.36 1.2	0.29 1.1	0.58 1.1	0.42 1.2
33. Way of attacking	0.90 0.9	0.61 1.1	0.71 1.1	1.02 0.8	1.03 0.7	1.02 0.8
34. Way of counterattacking	0.11 1.2	-0.06 1.2	0.12 1.2	0.06 1.3	-0.04 1.2	0.37 1.1
35. Ease of getting ippon	0.61 1.2	0.58 1.2	0.38 1.2	0.95 1.0	0.66 1.2	1.14 0.8
36. Ease of getting points	0.92 1.0	0.88 1.0	0.87 1.0	0.98 1.0	0.82 1.0	1.20 0.7
37. Graspling form	0.68 1.2	0.22 1.3	0.77 1.1	0.93 1.0	0.80 1.1	1.17 0.9
38. Posture in contest	0.46 1.2	0.45 1.1	0.56 1.1	0.43 1.2	0.45 1.2	0.57 1.2
39. Preferred hand	0.14 1.3	0.20 1.3	0.66 1.2	0.05 1.3	-0.15 1.4	-0.12 1.3
40. Appearance of technique	-0.37 1.3	-0.10 1.4	-0.32 1.3	0.00 1.5	-0.57 1.2	-0.61 1.3
41. Combination with another technique	0.66 1.1	0.71 1.1	0.45 1.2	0.65 1.1	0.63 1.2	0.68 1.0
42. Own skill level	0.68 1.1	0.79 1.0	0.55 1.2	0.58 1.2	0.71 1.1	0.75 1.1
43. Difficulty of technique	0.19 1.3	0.30 1.2	-0.12 1.3	-0.06 1.3	0.32 1.3	0.29 1.3

Note) T : Two-arm Shoulder Throw O : One-arm Shoulder Throw I : Inner Thigh M : Major Outer Reaping
S : Sweeping Loin

従って、個々の得意技選択に関する決定要因について分析すると、全体では高い値を示さなかった項目であっても、技によっては決定要因として影響を及ぼすと推測される。つまり、内

股群及び大外刈群に関しては、足の長さが得意技を決定する大きな要因であると推測される。また、払腰群については、体重及び体型が身長の高さの他に得意技を決定する重要な要因であ

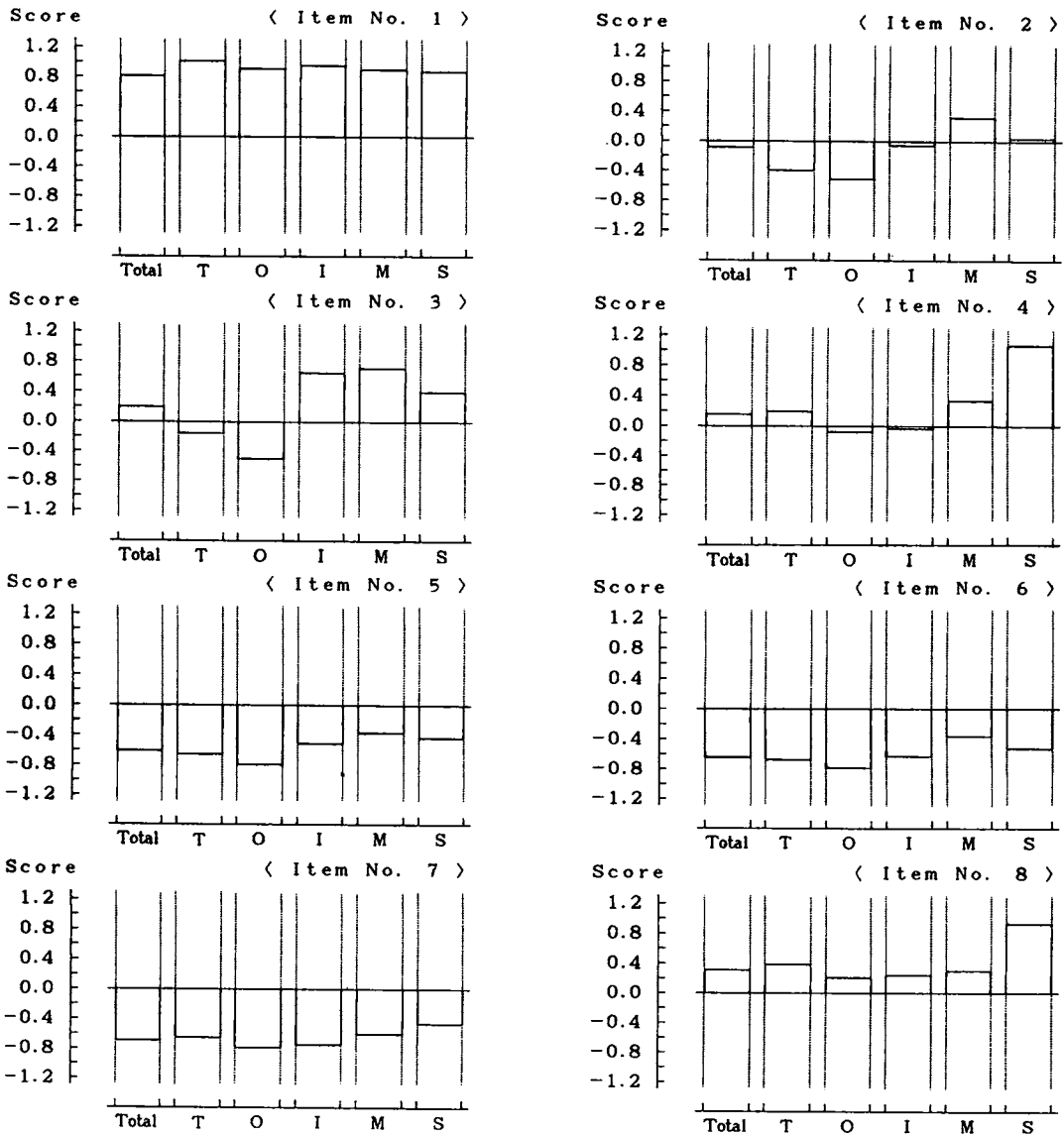


Figure 1-1 Comparison among the judoist groups classified by favorite technique

ると考えられる。

b. 身体機能に関する特性について

身体機能に関する項目における選手全体及び得意技別の比較は Figure 1-2 に示す通りである。

標本全体で見ると、得意技選択に関係する程度を示す値は 8 項目全てにおいて正の値が認め

られた。その内、0.50以上の値が認められた項目は、10. 腕力の強さ(0.67), 11. 脚力の強さ(0.70), 12. 柔軟性(0.56), 14. 器用さ(0.62), 15. 動きの速さ(0.90)及び16. 安定性(0.63)であり、特に15. 動きの速さにおける値は全43項目中2番目に高い値であった。

従って、全体的には得意技選択において身体

機能に関する諸特性が考慮される傾向にあり、特に関係するものは握力のような局所的な筋力よりもむしろ腕力及び脚力というような四肢の筋力や動きの速さ、柔軟性、器用さあるいは安定性といった全身的な特性であると推測される。

得意技別についてみると、唯一、13. スタミナの項目の大外刈群において負の値が認められ

たが、残りの項目においては全て正の値が認められた。払腰群は、9. 握力の強さ、10. 腕力の強さ、13. スタミナ及び16. 安定性の項目において、他の群よりも比較的高い値を示していた。また、内股群については11. 脚力の強さ、12. 柔軟性及び14. 器用さの項目において5群の内最も高い値が認められた。

つまり、得意技別にみた場合にも、得意技選

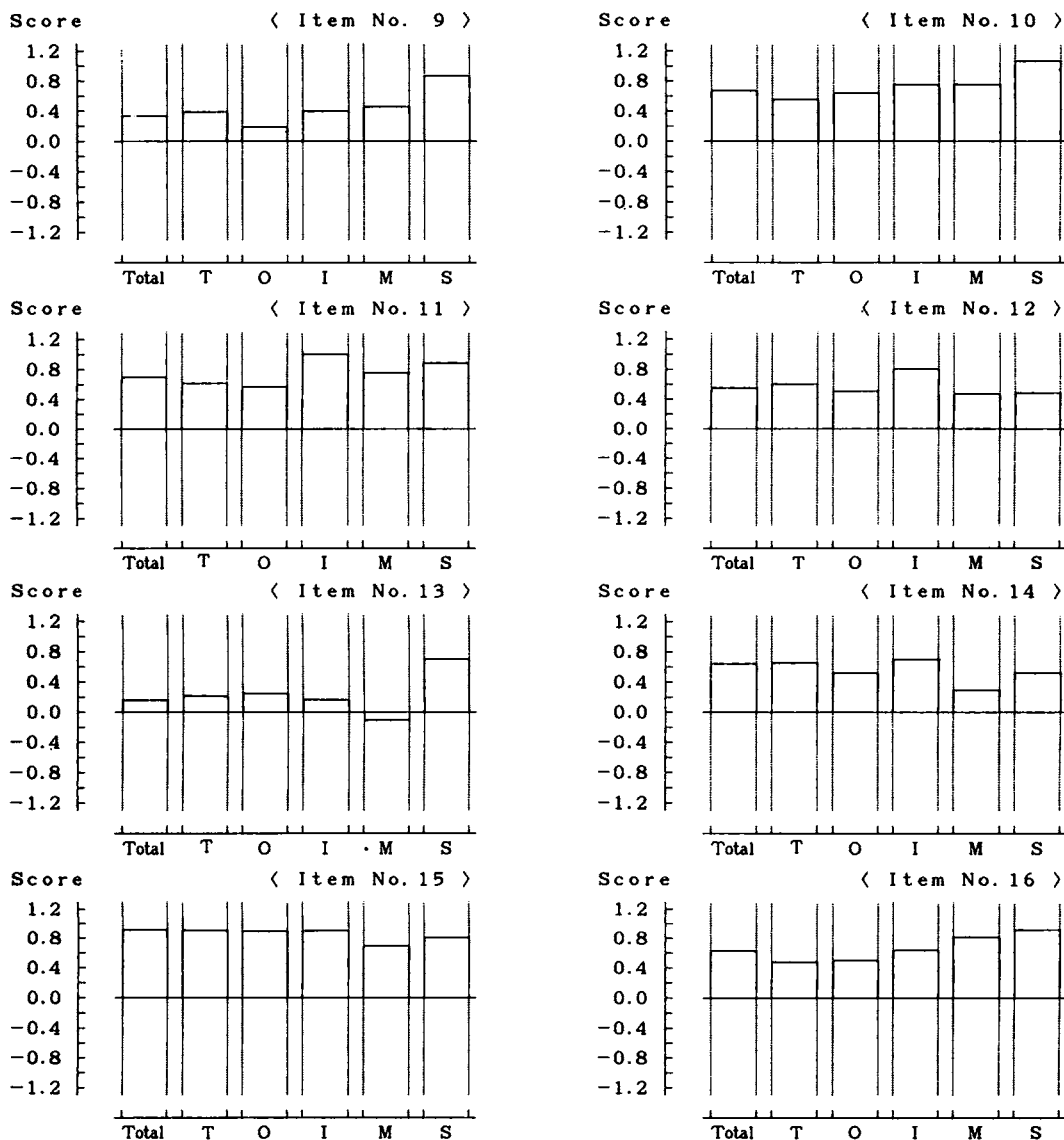


Figure 1-2 Comparison among the judoist groups classified by favorite technique

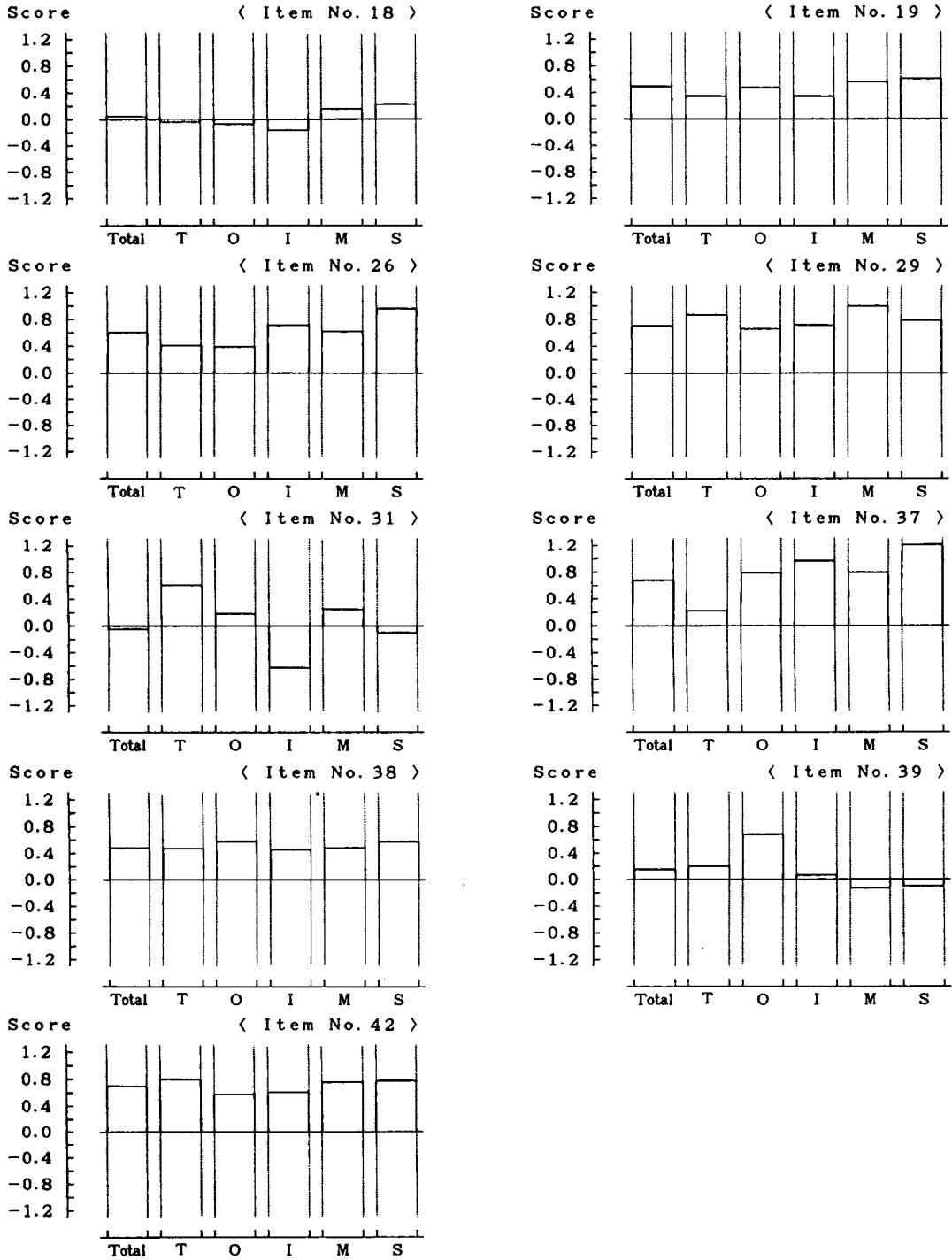


Figure 1-3 Comparison among the judoist groups classified by favorite technique

択に身体機能に関する特性が程度の差異はあるが一般的に考慮される傾向があると推測される。特に、得意技として払腰が選択される際には、他の技とは異なり持久性が考慮され、次に握力及び脚力といった筋機能に関する特性が選択の基準となりうると考えられる。また、内股が得意技として選択される場合には、脚力すなわち下半身の筋力に加えて柔軟性や器用さという関節機能及び神経機能の特性が得意技選択の主な決定要因となると推測される。

c. その他の特性について

その他の特性に関する項目の選手全体及び得意技別の比較は Figure 1-3 に示す通りである。

全体についてみると、31. 技を習った順序において負の値が認められたが、残りの8項目では正の値が認められた。0.50以上の値を示した項目は、26. 過去の試合の成績(0.59), 29. 練習量(0.69), 37. 組み方(0.68)及び42. 自分の技能レベル(0.68)であった。

五十嵐ら⁹⁾によると、得意技を決定する要因として体格の次に技を習った順序が重要であることを報告しているが、本研究では若干ではあるが負の値が認められ異なる結果が得られた。これは、得意技別のところでも後述するが、この項目においては得意技により決定要因となる程度が異なる為であると推測される。つまり、本研究において技を習った順序で高い値を示している双手背負群の標本数は、内股及び一本背負投群に次ぎ大きな値を示しているのに対し、前述の研究では、背負群が全標本の内最も大きな割合を占めており、標本の中での背負群の占める割合が異なること、あるいは五十嵐らが高校柔道選手を対象としているのに対し、本研究では主に大学柔道選手を対象としている為、このような差異が生じたと推測される。

しかしながら、本研究における標本に占める各得意技群の割合は、以前の調査結果^{14),15)}と概ね一致する割合であるので、今回の結果を全体的な傾向として捉えても問題はないと考えられる。

また、他の項目について全体的にみると得意技を決定する上で大きな影響を及ぼすものは過去の試合成績や練習量という柔道選手自身の経験に基づくものや、組み方あるいは技能レベルといった個人的な特性であると推測される。

得意技別についてみると、特に5種類の技で異なる傾向が認められた項目は、31. 技を習った順序, 37. 組み方及び39. 利き手であった。

技を習った順序については、双手背負群が正の高い値を示しているのに対して、内股群は負の値を示していた。この背負群について技を習った順序が決定要因として大きな影響を及ぼすという結果は尾形ら¹⁴⁾と一致する結果であった。また、37. 組み方については、払腰群が最も大きな値を示し、一本背負群、内股群及び大外刈群と共にいずれも0.70以上の高い値が認められたのに対し、双手背負群のみ低い値を示していた。

39. 利き手については、一本背負群のみ比較的高い値を示していたが、他の群では、どちらの傾向をも示す顕著な値は認められなかった。

従って、内股が得意技として選択される場合、技を習った順序は、殆ど関係ないが、双手背負投が選択される場合には、技を習った順序が重要な決定要因となると推測される。また、双手背負投を得意とする群においては、得意技選択の際、組み方が他の群に比べあまり考慮されないと考えられる。また、一本背負投が得意技として選択される時には、他の群とは異なり特に利き手が考慮されると推測される。

2 得意技選択と技本来の特性との関係

技本来の特性に関する項目における選手全体及び得意技別の比較は、Figure 1-4a 及び 1-4b に示す通りである。

全体で比較すると、11項目の中で、25. けが(けがをしにくい技であること等)及び40. 技のかっこよさ・美しさにおいて負の値が認められたが、残りの項目においては正の値が認められた。特に、33. 掛けやすいこと(0.90)及び

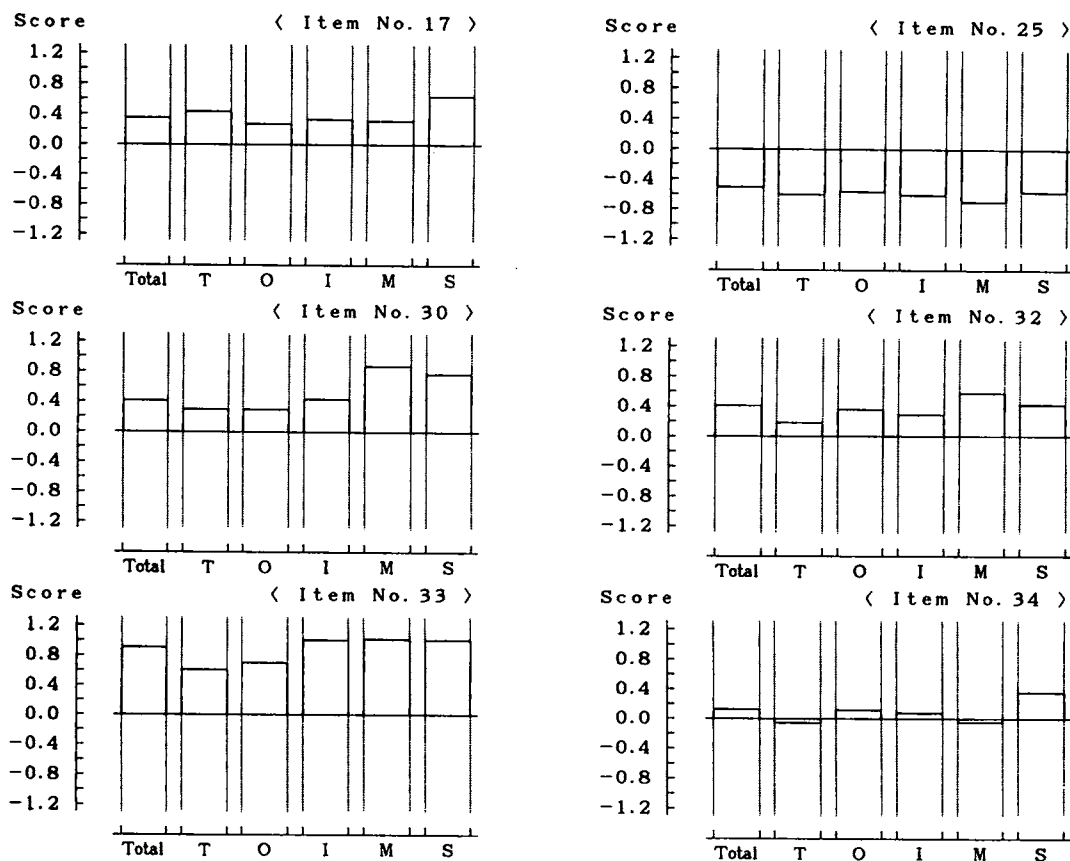


Figure 1-4a Comparison among the judoist groups classified by favorite technique

36. ポイントを取りやすいこと (0.92) の値は、全43項目中、1番目と2番目に高い値であった。

従って、柔道の投げ技において得意技が選択される場合には、全般的に、技本来の諸特性が考慮されると考えられる。また、特に、技本来の特性として、掛けやすく有効な技であるかどうか、主な決定要因となると推測される。

得意技とけがについては、背負投を得意技とする者の釣りの肘の骨軟骨障害等^{10),20)}あるいは技を施した時に受傷しやすい傷例等^{22),23)}が報告されており、得意技と外傷・障害とは密接な関係があると考えられている。しかしながら、本調査によれば、得意技を選択する際、得意技と関係のある傷害等については、殆ど考慮されないと推測される。このようなことの原因の1つとして、得意技と外傷・傷害等に関する研究

結果が、一般に浸透していないことが考えられるが、柔道における外傷・傷害の予防という見地に立てば、得意技の指導においては、指導者あるいは練習者の正しい知識のもと、今後さらに適切な指導がなされるべきであろうと考えられる。

得意技別にみると、30. 練習方法において大外刈群及び払腰群、35. 一本を取りやすいことにおいては内股群あるいは払腰群が、それぞれ、他の群に比べて若干高い値を示していたが、特に、得意技によって著しく異なる傾向は認められなかった。

従って、得意技を決定する際の決定要因として関係する程度は、得意技の種類に関わらず殆ど差異はないと推測される。

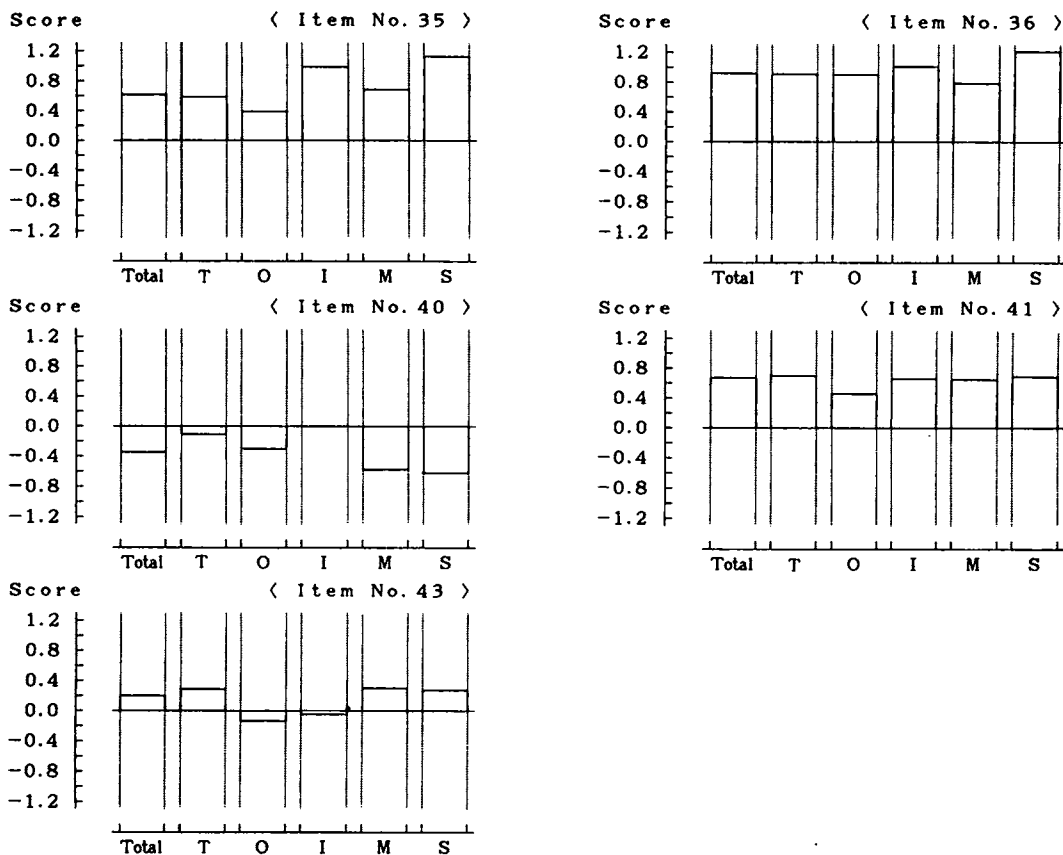


Figure 1-4b Comparison among the judoist groups classified by favorite technique

3 得意技選択と柔道選手をとりまく環境に関する特性との関係

各項目における選手全体及び得意技別の比較は Figure 1-5 に示す通りである。

全体について比較すると、7項目の内、27. 学校の伝統 (-1.13) 並びに28. 有名選手の影響 (-0.89) で非常に低い値が認められたが、その他の項目においては正の値が認められた。

20. 監督 (先生) の指導・助言及び21. 先輩・同級生の指導・助言における値は、いずれも0.50以上の値を示していた。

火箱ら⁴⁾は、得意技を決定する際、他の人の影響が大きいことを示唆しており、具体的には、他の人の試合あるいは指導・助言が得意技決定の大きな要因であることを報告している。本研

究においても、監督や先輩の指導・助言が得意技決定において大きな影響を及ぼすという点で同様な結果が得られた。しかし、前述の研究において、他の人の試合の影響が大きいことが示唆されているのに対し、本研究では有名選手の影響は殆どない傾向が認められた。従って、得意技選択の際には、有名選手のような一流選手の影響よりも、むしろ身近な指導者あるいは選手の影響を大きく受ける傾向があると推測される。

また、得意技を選択する際、指導者あるいは先輩等の柔道経験者の指導・助言が、主に決定要因となると推測される。一方、学校の伝統や有名選手の影響は、得意技選択とは殆ど関係ないと考えられる。

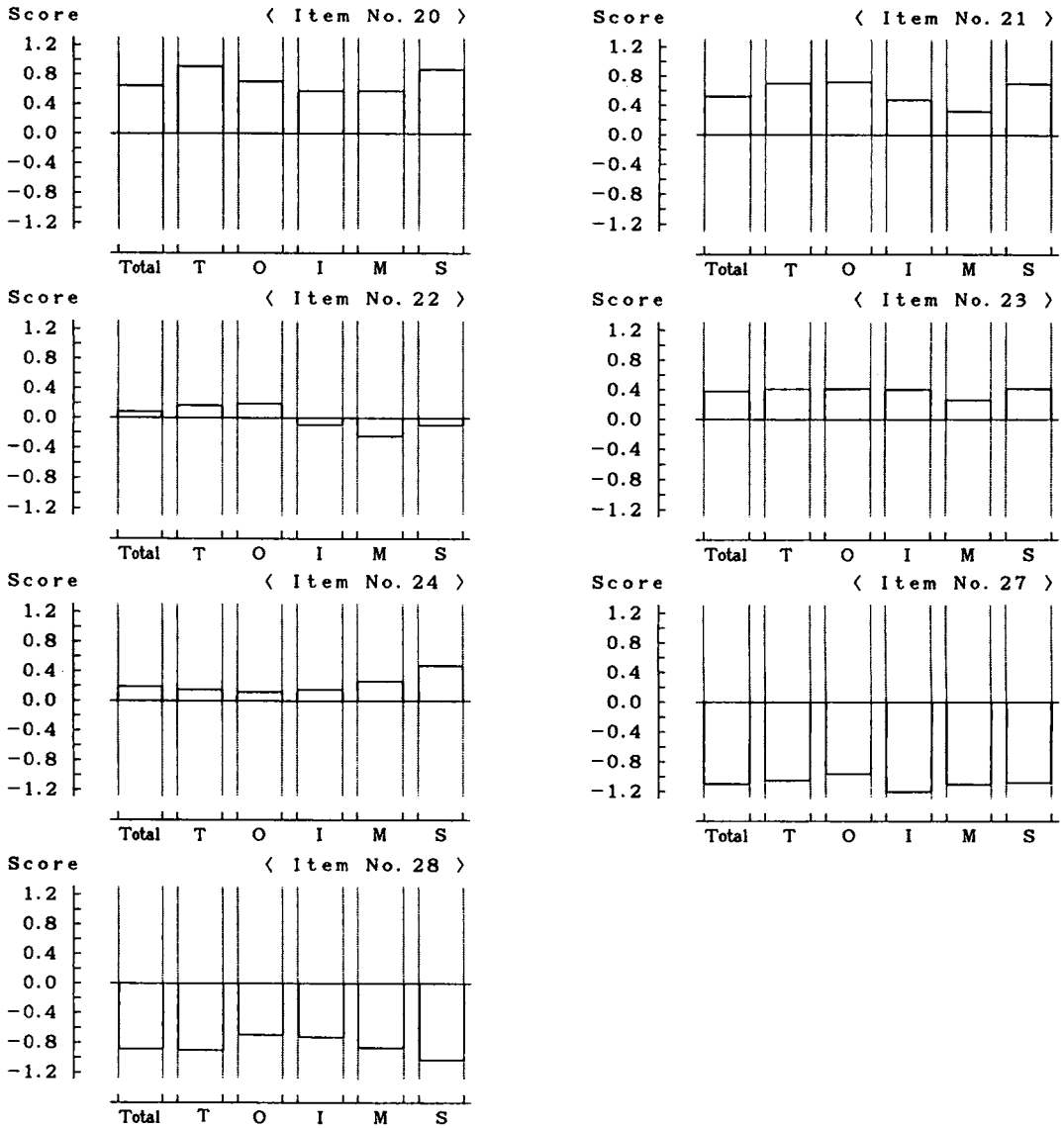


Figure 1-5 Comparison among the judoist groups classified by favorite technique

得意技別についてみると、22. 練習相手の技の種類において背負系統の2群が正の値を示しているのに対し、他の3群は負の値を示していた。また、24. 練習相手のレベルにおいては、払腰群が最も高い値を示していたが、全般的には、特に得意技の種類による差異は認められない傾向にあった。

従って、柔道選手をとりまく環境に関する諸要因による得意技選択に及ぼす影響は、特に得意技によって差異はないと推測される。

要 約

大学柔道選手919名（分析標本数809名）を対象として、1. 柔道選手自身の特性に関する側

面、2. 得意技本来の特性に関する側面及び3. 柔道選手をとりまく環境に関する3側面から、柔道の得意技選択における決定要因の分析を行った結果、以下に示すような示唆が得られた。

- 1 体格に関する特性においては、特に身長の高さが得意技を決定する際に大きな決定要因となると推測された。また、全体的には殆ど考慮されることのないと認められた局所的な身体諸特性も、得意技の種類によっては決定要因として関係することが示唆された。
- 2 得意技の選択の際、身体機能に関する諸特性は全般的に考慮される傾向にあると考えられたが、特に全身的な特性が主に決定要因となると推察された。更に、筋機能、関節機能あるいは神経機能に関する諸特性は、得意技の種類によって、それぞれ異なる程度で得意技選択の決定要因として関係することが認められた。
- 3 個々の柔道選手自身の過去の試合成績や練習量等の経験に基づく事柄や現在の個人的な諸特性、すなわち組み方や技能レベルは、得意技を決定する際に考慮されると考えられた。
- 4 得意技選択と技本来の特性との関係から考察すると、得意技が選択される際には全般的に技本来の諸特性が考慮されると推測された。その中でも、技の特性として、掛けやすく有効な技であるかどうか得意技決定の大きな要因として影響を及ぼすと考えられた。
- 5 柔道選手をとりまく環境が得意技決定に及ぼす影響を調べた結果、決定要因として主に関係するのは指導者あるいは先輩等の柔道経験者の指導・助言であることが示唆された。一方、学校の伝統あるいは有名選手の影響は殆ど関係がないことが認められた。

なお、本研究の要旨は、日本体育学会第39回大会において発表した。

注

- 注1) 本調査においては、質問項目の組み合わせにより、回答相互間の矛盾を検討する形式をとった。
 注2) 柔道の投げ技についての英語名は数多く存在する¹⁷⁾ので、本研究においては、講道館等⁸⁾¹²⁾の定める以下に示す英語名を図表において用いた。

双手背負投=Two-arm Shoulder Throw

一本背負投=One-arm Shoulder Throw

内股=Inner Thigh

大外刈=Major Outer Reaping

払腰=Sweeping Loin

- 注3) 講道館の定める技の名称¹¹⁾においては、「双手背負投」と「一本背負投」は「背負投」として分類されているが、今回は区別して分析を行なった。

謝 辞

この度、「柔道の得意技に関する調査」を実施するにあたり、本調査の主旨をご理解いただき、貴重な時間をさいてご協力いただいた全国の大学、高等専門学校並びに太学校の柔道部顧問・監督の諸先生方には、この場を借りて謝意を表する次第である。

引用・参考文献

- 1) 青柳 領・梶山彦三郎・竹内善徳・中村良三・小俣幸嗣「柔道投技における得意技の統計学的構造」体育学研究, 32-4: 241-8, 1988.
- 2) 浅見高明「柔道における技術的特性の科学的解明」武道学研究, 11-2: 112-3, 1978.
- 3) 火箱保之・藤猪省三・平野嘉彦・大谷崇正「柔道の得意技についての研究 第1報 一柔道選手の得意技と体格について」日本体育学会第31回大会号: 666, 1980.
- 4) 火箱保之・藤猪省太・平野嘉彦・大谷崇正・花田敬一「柔道の得意技についての研究 第2報 一柔道選手の得意技についての意識調査」日本体育学会第32回大会号: 634, 1981.
- 5) 五十嵐敬一・金芳保之「柔道の得意技に関する研究 その1 得意技の因子について」体育学研究, 10-1: 88, 1965.
- 6) 五十嵐敬一・金芳保之「柔道の得意技に関する研究 その2 得意技と運動能力及び行動特性について」体育学研究, 10-2: 275, 1966.
- 7) 五十嵐敬一・金芳保之「柔道の得意技に関する研究

- 3 得意技と精神特性について」体育学研究, 11-5:220, 1967.
- 8) Inokuma, I., Sato, N. 'BEST JUDO' Kodansha Int., 1980.
- 9) 岩田家正「柔道の得意技と体格について」日本体育学会第24回大会号:346, 1974.
- 10) 金当国臣「柔道におけるスポーツ傷害の研究(その3) 一得意技と傷害との関係について」日本体育学会第22回大会号:411, 1971.
- 11) 講道館, 講道館柔道の技名称, 講道館, 1985.
- 12) KODOKAN 'ILLUSTRATED KODOKAN JUDO' Kodansha, 1970.
- 13) 松本芳三, 現代スポーツコーチ全集, 柔道のコーチング, 大修館書店, 1980, p.216.
- 14) 村瀬智彦・出村慎一・徳田喜平・中比呂志・勝木豊成・岡島嘉信「柔道選手の得意技と体格及び階級との関係」教育医学, 33-1・2:66-7, 1987.
- 15) 尾形敬史・根本 進「柔道における得意技(投げ技)の研究」茨城大学教育学部紀要, 27:71-91, 1978.
- 16) 大谷崇正・火箱保之・藤猪省太・平野嘉彦・花田敬一「柔道の得意技についての研究 第3報 一柔道選手の得意技と性格について」日本体育学会第32回大会号:635, 1981.
- 17) 新野公明「柔道投げ技の英語名に関する研究(1)」武道学研究, 17-1:90-1, 1985.
- 18) 田中秀幸「柔道の投げ技について(3) 一得意技別にみた平衡能力について」日本体育学会第22回大会号:251, 1971.
- 19) 樽木豊秀・平沼正治・松永郁男「柔道における体格と得意技の研究」武道学研究, 15-2:8-9, 1982.
- 20) 上畑元宏・佐藤啓三・神納英治・田中和具・竹内一喜・園田万史・藤田久夫・稲田 学「中学生柔道選手にみられた股関節障害・外傷の5例」臨床スポーツ医学, 2(別冊):234-7, 1985.
- 21) 藪根敏和・川村慎三・浅見高明・竹内善徳・中村良三・石島 繁・松井 勲「得意技, 階級別に見た柔道選手の形態的, 姿勢的特徴について」武道学研究, 15-2:129-30, 1982.
- 22) 米田 實「1. 柔道 一柔道による外傷・障害の実態とその予防に向けての考察」体育の科学, 38-2:207-12, 1988.
- 23) 米田 實・矢崎 進・藤田實二・青木国雄・長谷川優「柔道選手の Heberden 結節」臨床スポーツ医学, 3-6:617-9, 1986.
- 24) 吉岡 剛・青柳 領・菅波盛雄・武内政幸・上口孝文・大崇崎日出夫・飯田頼男「柔道選手の得意技と体力の構造との関連について」武道学研究, 16-1:146-7, 1984.